4．探究活動の実践

＜活動の内容＞

日々園庭や散歩先で見かけ、親しんでいるダンゴムシがどのように生活をしているのか、飼育をしてみることで知っていく。観察や世話を通じて様々な発見をし、自分なりの考察をしたり、図鑑などを活用して生態について知識を得たり、探究を進めていく。

＜活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり＞

公園に遊びに行くときに担任が小さな飼育ケースを持参。目ざとい子が「ダンゴムシ入れていい？」と聞きに来て集め始めた。餌のつもりで葉を入れ、食べるところが見たいという事で逃がさずに持ち帰る。念のため担任が茄子とニンジンを入れておく。翌々日、観察していた子が「食べてる！」と声を上げると数人が集まり、興味深く見る。餌を調べようと本を探す。「ニンジンでしょ、キャベツでしょ、新聞紙、段ボールも！」「明日給食の先生にキャベツもらおう。」「もっといっぱい育てたい」担任は大きな飼育ケースを準備した。休み明けの月曜日死んでいるダンゴムシを見つけ、「お休みでやってなかったことなんだろう」の声。絵本を調べ、湿り気と餌が腐るいう事に気づく。腐葉土をもらって土と混ぜケースに入れる。湿り気はティッシュを使ってケースに水敵を付けていた。飼い始めてから1週間ほどで、「自分たちがお世話する」と行うようになる。９時になると給食室に「ダンゴムシの餌下さい」ともらいに行く。水の入ったスプレーボトルを置いておくと、気付いた子が湿り気を与える。もらった数種類の野菜を与え、食べるものと食べないものがあるのに気づく。担任が野菜の名前を書くとその横に〇×を付けてチェックし始めた。その後、餌の交換や死んでしまったダンゴムシを園庭に埋める等、秋口まで世話を続け、冬になる前に公園に返した。赤ちゃんダンゴムシの誕生や、脱皮した抜け殻なども発見していた。デジタル顕微鏡で観察すると、他のものも拡大して見て楽しむ遊びか始まった。







5．振り返り

＜振り返りによって得た保育者の気づき＞

こどもの興味に対する保育士の関わりかたで、活動が豊かに発展していくことを確認した。子ども同士で広げ合い、共有することで新たな関係が広がることを確認した。一つの題材での活動で子ども一人一人の興味の持ち方、行動力など今まで担任に見えづらかった姿が現れてとても新鮮だった。顕微鏡でダンゴムシを見た時は、図鑑で見るよりも強く刺激を受け、驚きや発見気付きがあり豊かな時間になった。